

## 第4章 小学生以前の英語学習経験の影響 ～日本の小学校英語教育の課題への考察

松山大学教授 金森 強

### 1. はじめに

2004年に行われた本調査の先行調査となる「東アジア高校英語教育GTEC調査」の中でも、最も注目すべき結果の一つとして、韓国における小学校英語の長期的効果が検証された点が挙げられる。これは、2003年の高校1年生(小学校英語非経験)と2004年の高校1年生(小学校英語経験)との比較分析で、GTEC for STUDENTS総得点やリスニング、ライティングの成績において、小学校での英語学習経験のある2004年の高校1年生のほうが2003年の高校1年生を上回るというものであった。英語力を直接的に、大規模なサンプルで測った検証研究としては韓国でも初めてのものであった(権、2005)。翻って日本をみたとき、小学校で英語教育が今後必修化された場合、韓国同様、中学・高校段階での生徒の英語学習に対する意識や英語力が変化することが予想される。その意味から、既に小学校段階で英語活動の時間を経験した現在の高校生について、その実態や英語学習経験に関するデータを収集しておくことは、長期的にみたときに非常に重要であると思われる。そこで、本調査では日本での調査項目に、小学生以前の英語学習経験などに関するものを加えた。

本章では、その調査結果から、高校生の小学生以前での英語学習経験の実態や、その経験の高校生段階での影響について分析する。その上で、小学校における英語教育の成果の見通しや課題について考察する。

### 2. 分析の対象・方法

本章では、日本の高校1・2年生合わせて、3,700人を対象として分析を行った(表4-1)。

分析結果を述べるにあたり、本調査のサンプリングについて留意すべき点を述べておきたい。本調査では、小学生以前の英語学習経験に関する調査項目を新たに設けているが、そもそも「総合的な学習の時間」の活動の一つとして小学校で外国語会話活動が正式に始まったのが、本調査対象の高校1年生が小学6年生の時(平成14年度)であり、高校2年

表4-1 分析対象

| 学校数<br>(校) | 高校1年生<br>(人) | 高校2年生<br>(人) | 合計<br>(人) |
|------------|--------------|--------------|-----------|
| 10         | 2,205        | 1,495        | 3,700     |

生が小学生の時にはまだ移行措置段階であった。つまり、調査対象者には小学校において英語学習を経験していない生徒が多く含まれる可能性があり、その部分のデータを十分に収集できないという懸念があった。そこで、我々は調査対象の高校生が小学生だった時代に、小学校での英語活動を積極的に行っていた地域(文部科学省の研究開発学校などがあった地域など)を抽出し、その地域にある高等学校を意図的に調査対象校の中に複数校組み込んだ。したがって、本調査の高校生の英語学習経験の結果を一般化することはできないため、あくまでも事例研究として以降のデータをご参照いただきたい。

また、分析方法としては、調査対象へのアンケート結果の記述統計、および英語コミュニケーション能力調査(GTEC for STUDENTS)のスコアとのクロス集計などにより分析した。

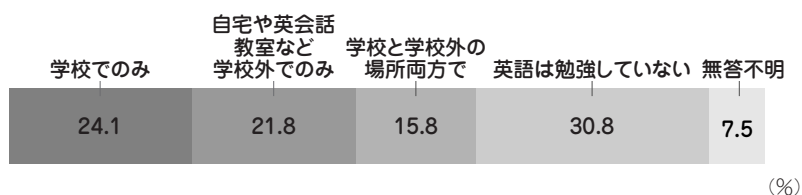
### 3. 分析結果と考察

#### 1) 調査対象者の小学生以前の英語学習経験の実態

##### (1) 小学生以前の英語学習の場所

まず、小学生以前に英語を学習した場所についてみてみよう(図4-1)。小学生以前での英語学習経験がない生徒が全体の約3割、何らかの形での英語学習経験がある生徒が約6割という結果であった。英語学習経験がある場合について詳しくみると、「学校でのみ」学習した生徒が最も多く全体の24.1%、次いで「自宅や英会話教室など学校外のみ」15.8%、「学校と学校外の場所両方」30.8%、「英語は勉強していない」7.5%、無答不明2.8%であった。

図4-1 小学生以前の英語学習の場所 (n=3,700)



## 小学生以前の英語学習の影響

(以降、学校外でのみ)」で学習した生徒が21.8%となっており、「学校と学校外の場所両方で(以降、学校と学校外両方で)」学習した生徒も15.8%いる。

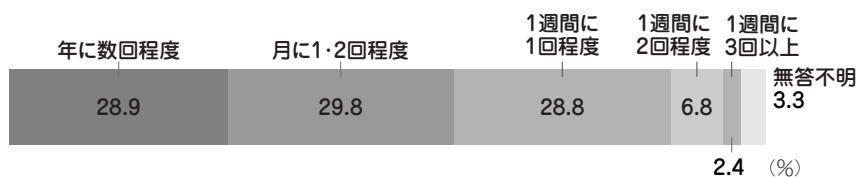
この調査の時点では「学校と学校外両方で」英語を学習した経験のある生徒は15.8%だが、現在はどのようになっているのであろうか。公立小学校への英語教育の導入が塾や英会話スクール等の学校外における英語学習の機会を増やす結果になっているのかどうか、大変興味深い。

### (2) 小学校での英語学習の頻度

次に、小学校での英語学習経験者に、英語学習の頻度についてたずねた結果をみてみよう(図4-2)。全体としては「月に1・2回程度」が最も多く約3割、ほぼ同じ割合で「年に数回程度」「1週間に1回程度」が続く。ここで、「1週間に1回程度」以上(「1週間に2回程度」「1週間に3回以上」を含める)と回答した割合をみてみると38.0%となっており、小学校英語経験者の約4割を占めることがわかる。文部科学省の調査(2003)によれば、調査対象の高校1年生が小学6年生だった平成14年度当時、全国の公立小学校での英会話の年間時数の平均は第6学年で12時間に過ぎず、本調査対象の高校生は英語教育を熱心に行っていた小学校出身者の割合が高いことがわかる。

しかし、たとえ「1週間に1回程度」英語学習を行っていても、翌週には学んだことも忘れてしまっている場合が多い。その意味で、今後小学校英語が必修化される場合、どれくらいの頻度で英語の授業を持つことができるのかは重要なポイントとなる。Benesse教育研究開発センターの調査(2007)によれば、公立小学校における英語教育の年間時数は、高学年でも平均16.1時間に過ぎないのが現状である。必修化されれば週1回(年間35時間)以上での英語教育が行われることになるだろうが、さらに週2回、週3回と頻度が高くなった場合、学習者の英語力にどのような違いが出るのかという点も興味深い。継続的な調査により、今後更に多くのことが明らかになることが期待される。

図4-2 小学校での英語学習の頻度 (n=1,475)



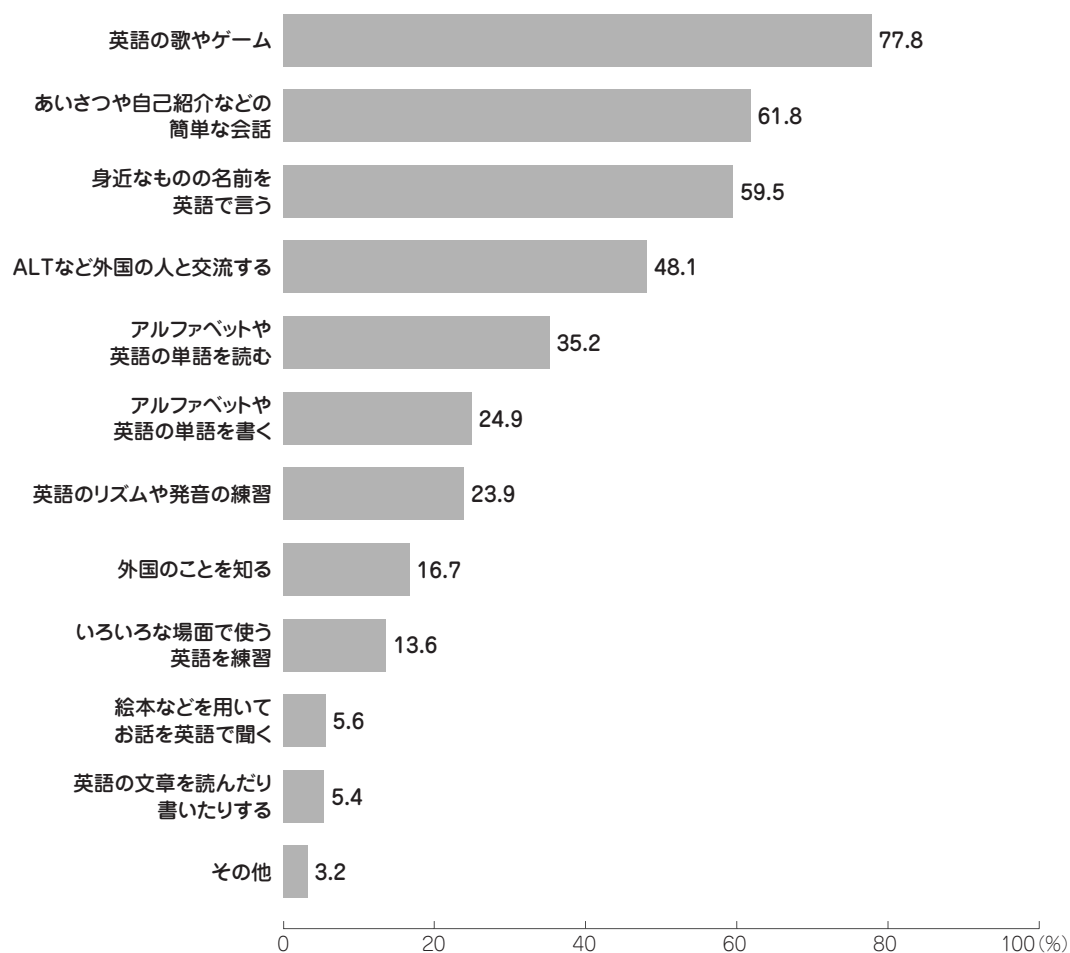
\*小学生以前に英語学習を「学校でのみ」「学校と学校外の場所両方で」学習した生徒のみ対象。

### (3) 小学校での英語学習の内容

高校生たちは、小学校時代にどのような英語教育を受けていたのだろうか。ここでは、小学校での英語学習の内容についてみてみよう(図4-3)。最も回答が多かったのは、「英語の歌やゲーム」で77.8%、これに「あいさつや自己紹介などの簡単な会話」61.8%、「身近なものの名前を英語で言う」59.5%が続く。その他の「ALTなど外国の人と交流する」や「アルファベットや英語の単語を読む」などの項目は、いずれも半数に届かなかった。

英語活動が小学校に導入された当初は、特に「英語は楽しく教えなければならない」という考え方が強く、ゲームや歌を用いて英語を繰り返し聞かせ、また短い会話文を繰り返

図4-3 小学校での英語学習の内容 (n=1,475)



\* 複数回答。

\* 小学生以前に英語学習を「学校でのみ」「学校と学校外の場所両方で」学習した生徒のみ対象。

\* 無答不明は図から省略した。

## 小学生以前の英語学習の影響

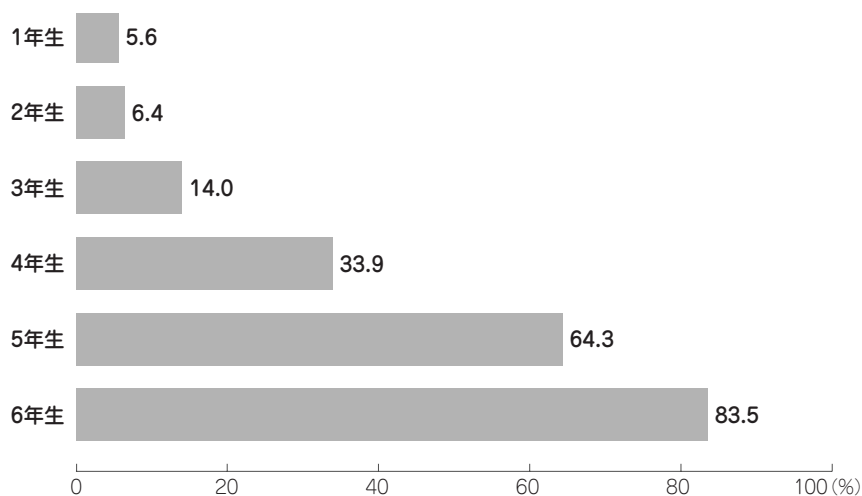
し言わせたりすることが推奨されていた。当時の実際の授業でも、楽しく盛り上がる授業作りを志向する傾向がみられたが、今回の調査結果にはそれが反映されていると感じる。しかし、その後、様々な課題があらわれる。例えば、高学年では単調な繰り返しの活動や、知的発達段階に合わない歌やゲームに飽きてしまい、徐々に英語の授業に興味を示さなくなってくるといった状況がみられるようになった。その対策として、今度は高学年の知的発達段階に合わせた活動に取り組む学校が出てくるのだが、音声英語の指導だけではなく、中学校英語の前倒し的な文字を用いた指導も実施されるようになる。また、実際には、本調査の項目として挙げられている活動例では表せないタイプの活動も現場では実施されていたことも考えられる。

活動内容については、その目的やねらいもあわせて調査することが必要であり、これは本調査の今後の課題である。

### (4) 小学校で英語学習をした学年

小学校は1年生から6年生まで、学年による知的・身体的発達の差が大きい。英語学習についても、どの学年で行ったのかが、学習内容などに大きく影響すると思われる。そこで、小学校での英語学習経験者に、英語を学習した学年についてたずねた結果が図4-4である。高学年、特に6年生では8割以上が英語を学習したと回答している。これに対して、

図4-4 小学校で英語を学習した学年 (n=1,475)



\*複数回答。

\*小学生以前に英語学習を「学校でのみ」「学校と学校外の場所両方で」学習した生徒のみ対象。

\*無答不明は図から省略した。

低学年で英語学習をした生徒は1割にも満たない。

このように、調査結果からは高学年からの実施が多いことがわかる。一方で、少数ではあるが、低学年で英語学習を経験した生徒もおり、この生徒が高校生段階でどのような英語力や英語学習への意識を持っているのかは、今後の分析課題として興味深い。また、今回の調査対象となった地域の小学校において、現在の英語学習実施学年が、学校外を含めてどのように変化しているのかも関心があるところである。

## 2) 小学生以前の英語学習経験の中学・高校生段階への影響

前項では、調査対象となった日本の高校生の小学生以前での英語学習経験の実態についてみてきた。本項では、その中でも主に「小学生以前の英語学習の場所」に着目し、その違いが高校生段階での英語学習に対する意識や英語力にどのような影響を与えているのかを分析する。

### (1) 小学生時の英語の好き嫌い

小学生以前に英語学習を経験した生徒について、その学習の場所別に小学生だった当時の英語の好き嫌いをたずねた結果が図4-5である。「好きだった」生徒の割合が最も高いのは、「学校と学校外両方で」で64.6%、これに「学校外でのみ」の55.3%が続く。「学校でのみ」の場合は「好きだった」割合が約4割程度だった。ただ、この点については、学校で英語学習を経験した生徒のうち、英語学習に対して意欲的な生徒が「学校と学校外両方で」に多く含まれることを考慮する必要がある。

また、「学校でのみ」で「好きでも嫌いでもなかった」の割合が高いこと、「学校外でのみ」で「嫌いだった」の割合がやや高いことが気になる。多くの場合、英語が苦手な子ほど英語は嫌いになる。「できない」「わからない」体験が多かったために英語が「嫌いだった」のか、活動自体が興味や関心が湧かないものであったからか、さらには特にどのような活動が「嫌いだった」のか等を探ることで、授業時数に応じた児童期にふさわしい活動内容がみえてくるものと考えられる。しかし、それでも高校生である現在の英語学習に対する調査結果「好き」\*1 (31.9%)、「好きでも嫌いでもない」(40.0%)、「嫌い」\*2 (27.7%)と比べると、小学校で受けた英語教育の評価は高い。教科として実施されていなかったことで成績

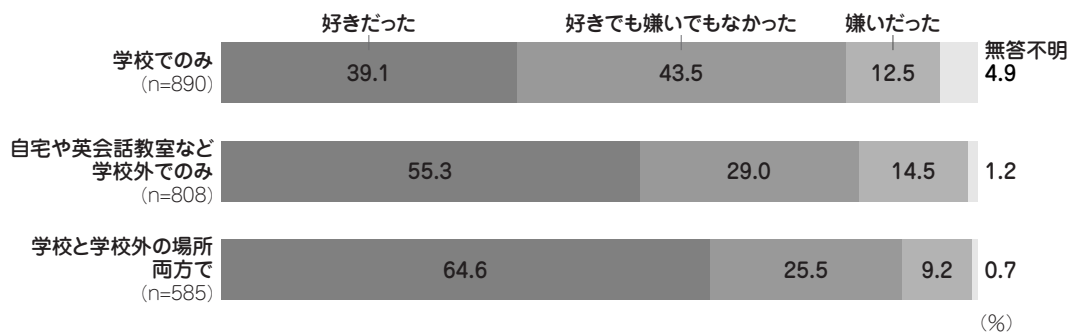
\*1 「好き」「最初は嫌いだったが、途中から好きになった」の%。

\*2 「嫌い」「最初は好きだったが、途中から嫌いになった」の%。

## 小学生以前の英語学習の影響

図4-5 小学生時の英語の好き嫌い(英語学習の場所別)

Q:小学生のときの英語学習は好きでしたか。



\*小学生以前に英語学習を経験したと回答した生徒のみ対象。

\*「好きだった」は「好きだった」「最初は嫌いだったが、途中から好きになった」の%。「嫌いだった」は「嫌いだった」「最初は好きだったが、途中から嫌いになった」の%。

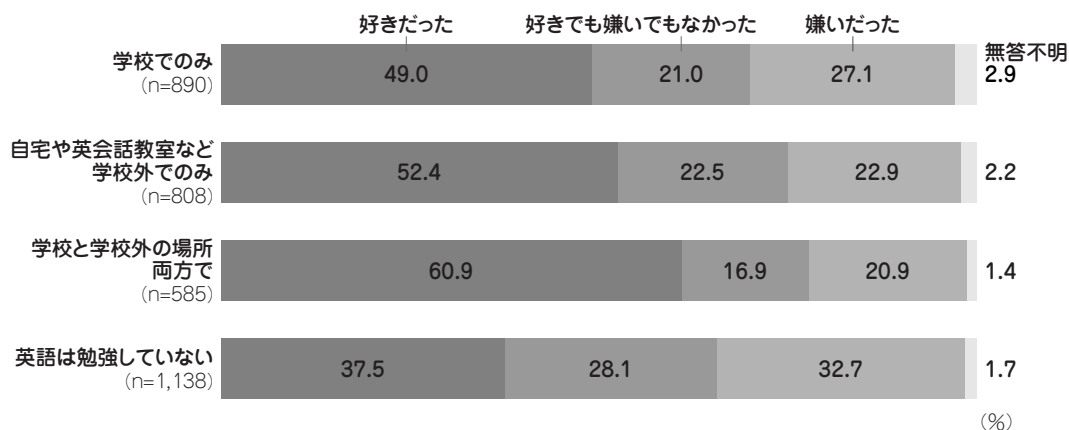
と結びつくマイナスのイメージが少なかったことも、その一因であろう。

## (2) 中学生時の英語の好き嫌いへの影響

次に、中学生時の英語の好き嫌いについて、小学生以前の英語学習の場所別にその影響をみてみよう(図4-6)。小学生以前での英語学習経験がある生徒のほうが、経験がない生徒よりも中学生時に英語が「好きだった」割合が全体的に高いことがわかる。また、中学

図4-6 中学生時の英語の好き嫌い(小学生以前の英語学習の場所別)

Q:中学生のときの英語学習は好きでしたか。



\*「好きだった」は「好きだった」「最初は嫌いだったが、途中から好きになった」の%。「嫌いだった」は「嫌いだった」「最初は好きだったが、途中から嫌いになった」の%。

生時の「嫌いだった」割合をみても、小学生以前での英語学習経験がない生徒が最も高い。

さらに、小学生以前での英語学習経験者について、その学習の場別に結果をみると、小学生時に「学校と学校外両方で」英語を学習していた生徒は、中学生時に英語が「好きだった」と答えた割合が最も高く、「学校外でのみ」「学校でのみ」と続く。また、小学生時での好き嫌いの結果と比べてみると、「学校と学校外両方で」「学校外でのみ」の場合、「好きだった」の割合は大きく変化していない。しかし、「学校でのみ」の場合は、小学生時で「好きだった」割合よりも約10ポイントも上昇している。要因が何であるのかについては精査が必要だが、小学校での英語学習経験者に関しては中学校で英語好きが増えるということになり、大変興味深い結果である。

### (3) 英語学習への意識や学習動機に与える影響

高校生段階での英語学習への意識や学習動機に、小学生以前の英語学習経験が与える影響はあるのだろうか。ここでは、小学生以前の英語学習の場所別に、その違いをみてみよう（図4-7）。英語学習への意識をたずねた「英語の授業で学んでいることは役に立つと思う」「英語の学習は自分の生活や人生において有意義だと思う」の2項目については、小学生以前に「英語は勉強していない」場合よりも、何らかの形で英語を学習した経験がある場合のほうが、「とても当てはまる」「まあ当てはまる」という肯定的な回答が約5～10ポイント高く、英語学習への意識が高いようである。

また、この2項目以外の項目は、「～なので（英語を）勉強する」というように、英語の学習動機についてたずねたものである。これらの項目の結果について、小学生以前に「英語は勉強していない」場合と、それ以外の何らかの形で英語学習経験がある場合との違いを、さらに詳しくみてみよう。ほとんど違いがみられないのは、「受験に必要なので勉強する」という項目で、学習経験の違いによらず約8割が肯定的な回答をしており、他の項目と比べても最も高い割合である。高校生にとっては、やはり受験という学習動機は非常に強いものであることを示す結果である。これ以外の学習動機に関する項目をみると、全体としては小学生以前に「英語は勉強していない」場合よりも、何らかの形で英語学習経験がある場合のほうが、肯定的な回答が多い傾向であることがわかる。

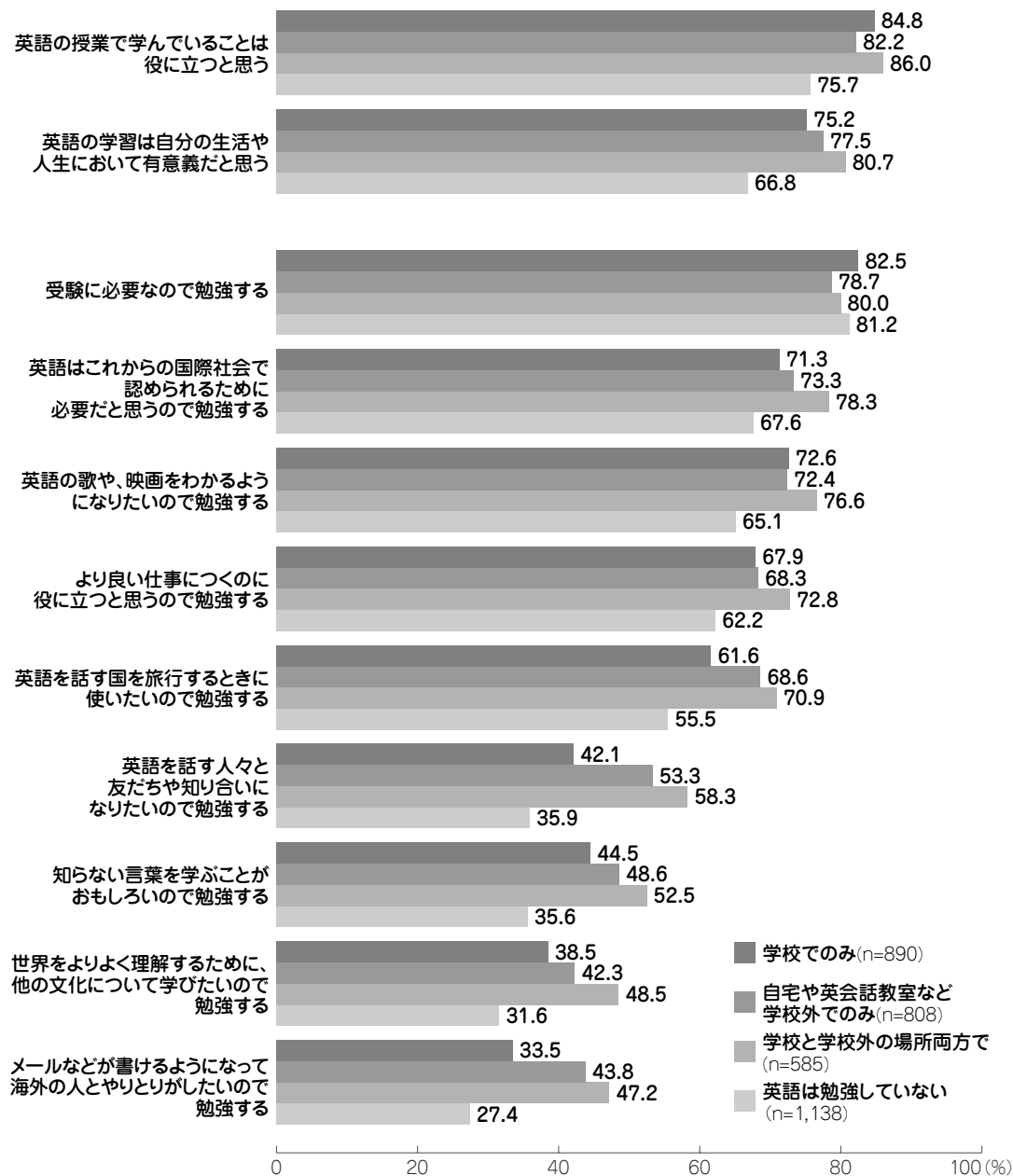
さらに、小学生以前での英語学習経験者について、学習の場所別に詳しくみると「学校と学校外両方で」学習した生徒は、「受験に必要なので勉強する」以外のどの項目でも最も肯定的な回答の割合が高く、英語の学習動機が多岐にわたり非常に高いことがわ



小学生以前の英語学習の影響

図4-7 現在の英語学習への意識  
(小学生以前の英語学習の場所別)

Q:あなたの英語学習について以下の項目について、当てはまる番号に○をつけてください。



\*「とても当てはまる」「まあ当てはまる」の%。

\*「あなたの英語学習について」たずねた27項目のうち、英語学習に対する意識や学習動機に関する項目11項目について図示した。

かる。次いで肯定的な回答が多いのは「学校外でのみ」学習した生徒で、「学校と学校外両方で」よりも若干低いものの、同じく高い学習動機を持っていることがわかる。最後に「学校でのみ」学習した生徒については、「学校と学校外両方で」学習している生徒よりも10ポイント程度肯定的な回答の割合が低いものもある。しかし、英語学習に意欲的な層が「学校と学校外両方で」に含まれている点を考慮すれば、「学校でのみ」での学習経験者の学習動機の低さだけで単純に小学校での英語教育の効果が低いとは言えない。

いずれにしても、小学生以前の英語学習経験が、高校生段階での英語学習への意識や学習動機の高さに影響しているということは言えそうである。今後は、学校外での学習内容まで詳しく調査し、その学習内容と英語学習への意識や学習動機との関係まで迫ることができれば、より示唆深い調査となるだろう。

#### (4) 英語学習の長期的な効果感

小学生以前の英語学習経験者は、その効果について高校生となった現在どのように感じているのだろうか。ここでは、小学生以前の英語学習の効果感についてたずねた項目を、小学生以前の英語学習の場所別にみてみよう(図4-8)。小学生以前に「学校でのみ」英語学習をした生徒よりも、「学校外でのみ」「学校と学校外両方で」英語を学習した生徒のほうが、スキルの面での効果を感じている割合が高い。しかし、「学校でのみ」学習をした生徒でも、関心・意欲・態度といった面での効果を感じている生徒は半数以上いる。

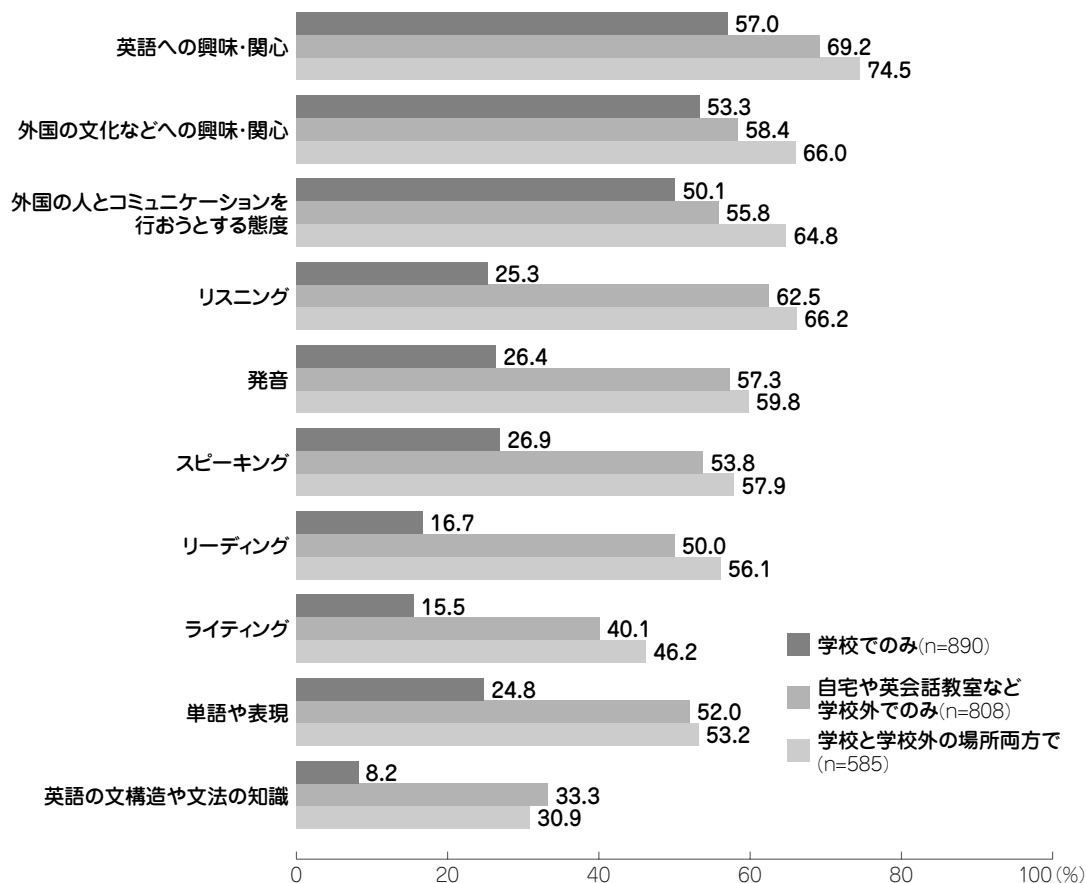
小学校における英語教育の授業時数の制限や活動内容・目的を考慮すると、「学校でのみ」で英語のスキル面の育成につながる結果が生じないのは当然である。教えていないものは身につかない。ただし、「学校でのみ」の場合でも「英語への興味・関心」「外国の文化などへの興味・関心」「外国の人とコミュニケーションを行おうとする態度」において、その効果にある程度の肯定感を得られているのは一定の評価に値するのではないだろうか。指導や活動内容の工夫をすることで、目的にあったより効果的な指導が期待されるところである。また、公立小学校での英語活動実施校が受検した音声中心の英語力試験の結果によれば(金森、2007)、英語力自体の向上もみられる。学習者が気づかない英語力の伸長につながっていることもあると考えられる。

いずれにしても、「学校と学校外両方で」英語を学んだ場合のほうが全ての項目において高い効果感を得ていることは明らかであるが、それが学習の場所によるものなのか、活動内容や授業時数、開始年齢などからくるものなのかが興味のある部分である。

## 小学生以前の英語学習の影響

図4-8 英語学習の効果感(小学生以前の英語学習の場所別)

Q:小学生のとき、およびそれ以前の英語学習は、自分の現在の英語力の土台・基礎になっていると思いますか。



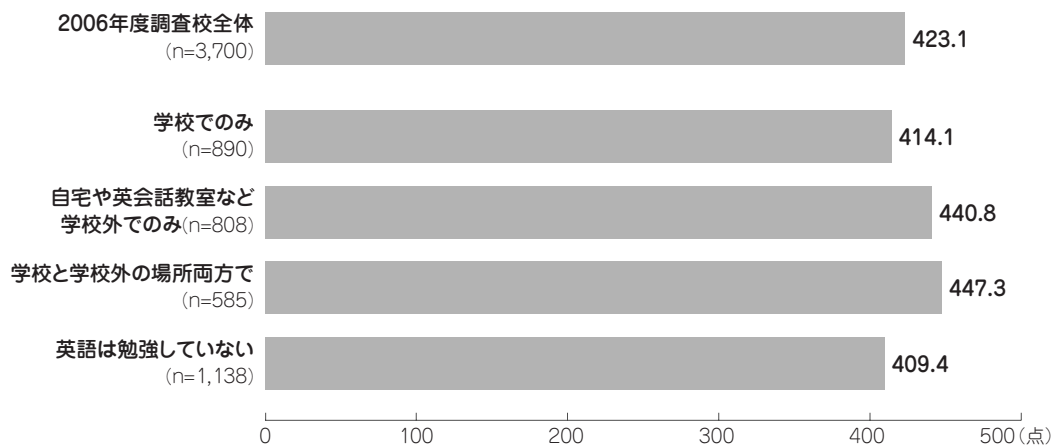
\*小学生以前に英語学習を経験したと回答した生徒のみ対象。

\*「とてもそう思う」「まあそう思う」の%。

## (5) 英語コミュニケーション能力(GTEC for STUDENTSスコア)への影響

最後に、小学生以前の英語学習の場所が、高校生段階の英語コミュニケーション能力、具体的にはGTEC for STUDENTSというテストの得点にどのように影響しているのかをみてみよう(図4-9)。最も得点が低かったのは「英語は勉強していない」場合で調査対象全体の平均よりも10点以上低い。「学校でのみ」学習経験がある場合の平均は、それよりも5点ほど高いが、やはり全体の平均には届かない。最も高いのは「学校と学校外両方で」、次いで「学校外でのみ」で、いずれも全体平均を20点程度上回る。

図4-9 GTEC for STUDENTSの平均トータルスコア(小学生以前の英語学習の場所別)



小学校では関心・意欲・態度の育成を中心とした英語教育が多く行われており、英語の技能を測るテストで顕著な成果がみられないのは当然と言える。一方で、「学校外でのみ」「学校と学校外両方で」英語を学習していた生徒は、小学生以前からスキル面での英語学習を行っていたわけで、その生徒の高校生段階での得点が高い点は興味深い。

#### 4. まとめと今後の課題

本章では、高校生の小学生以前での英語学習経験の実態や、その経験が高校生段階に与える影響について分析してきた。小学生以前での英語学習経験の実態について、1) 調査対象には英語教育に積極的に取り組んでいた小学校出身者が多く含まれていたこと、2) 小学生以前に学校外での英語学習経験がある生徒も約4割いたこと、3) 小学校での英語教育は高学年での実施が多く、またその内容は、歌やゲーム、簡単な会話が中心で、スキル面での学習はあまり行われていないことなどが、本調査の分析対象の特性としてわかった。

これを踏まえた上で、小学生以前での英語学習経験が中学・高校生段階に与えた影響を分析した結果、1) 学校外での学習経験者は、小学生時代に英語が「好きだった」割合が高いこと、2) 小学生以前の英語学習経験者は、経験がない場合よりも、中学生時に英語が「好きだった」割合や、高校生段階での英語学習への意識・学習動機が高いこと、3) 特に、小学生以前に「学校と学校外両方で」学習経験がある場合は、意識面のみならず、スキル面での効果感や実際のテストの得点も高いことなどがわかった。

## 小学生以前の英語学習の影響

これらの結果から、小学生以前での英語学習経験が、高校生段階での英語学習の意識や英語力にポジティブな影響を与えているとみることができる。小学校で英語が必修化される場合、教員の研修・養成を含む十分な条件さえ整えば、特に意識面での効果は期待できそうだ。また、韓国では必修化の後、小学校英語教育に関連する研究論文の数が顕著に増えた(大韓民国教育人的資源部、2007)。日本でも必修化に伴って様々な視点からの研究が進むはずであり、多面的な視点からの研究データが得られるものと考えられる。

反面、小学校での英語教育の必修化については、教育の目的・目標をどのように設定するか、その目標達成のために必要な授業時数の確保、指導法・教材の開発など、課題が多いことも事実である。指導法・教材開発は、特に中学校、高等学校における英語教育との連携のためにも重要である。台湾では既に小学校において授業についていけない児童のための補習授業を行っている学校がある。英語、外国語を学ぶことへの関心・意欲を育む指導であることはもちろん、中学校以降との連携を含め、一貫した教育カリキュラムを作り、小学校で英語嫌いや英語に苦手意識を持つ児童を増やさないことが大切である。また、小学校での英語教育と同時に、その成果を活かすためにも、中学校・高等学校の英語教育も変わることが望まれる。

### <参考文献>

- 権 五良(Oryang Kwon) (2005)「韓国における小学校英語教育が高校生の英語能力に与えた効果」ベネッセコーポレーション編『東アジア高校英語教育GTEC調査：高校生の意識と行動から見る英語教育の成果と課題』(株)ベネッセコーポレーション
- 文部科学省(2003)「平成14年度公立小・中学校における教育課程の編成状況等の調査結果について(概要)」
- Benesse教育研究開発センター(2007)『第1回小学校英語に関する基本調査(教員調査)報告書』
- 大韓民国教育人的資源部(研究責任者：権 五良)(2007)「小学校英語教育10年の成果分析による小中学校英語教育の活性化方案模索」(株)ベネッセコーポレーション翻訳
- 金森 強(2007)「求められる条件整備—韓国の成果と課題から—」小学校英語教育学会全国大会、研究発表資料